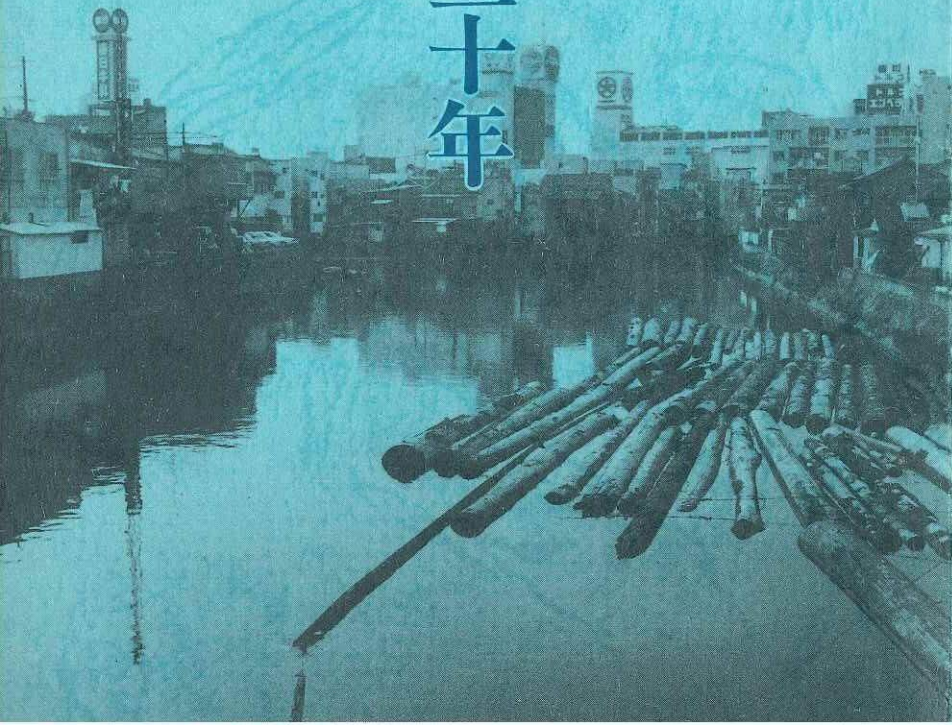


内川とともに二十年

原 峯三郎 著

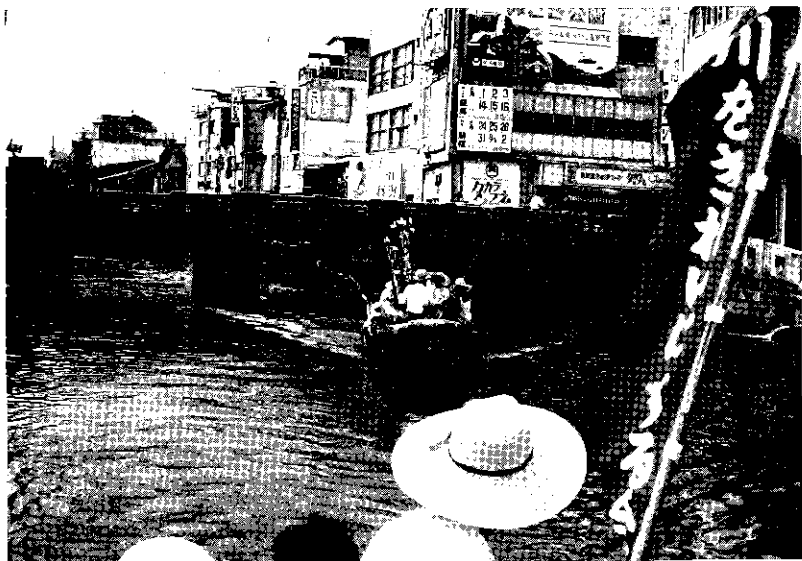
内川とともに二十年

内川をきれいにする会会長
原 峯三郎





内川の浄化を訴える若者
55年4月14日 大門川清掃



昭和47年8月6日 第一回船上視察



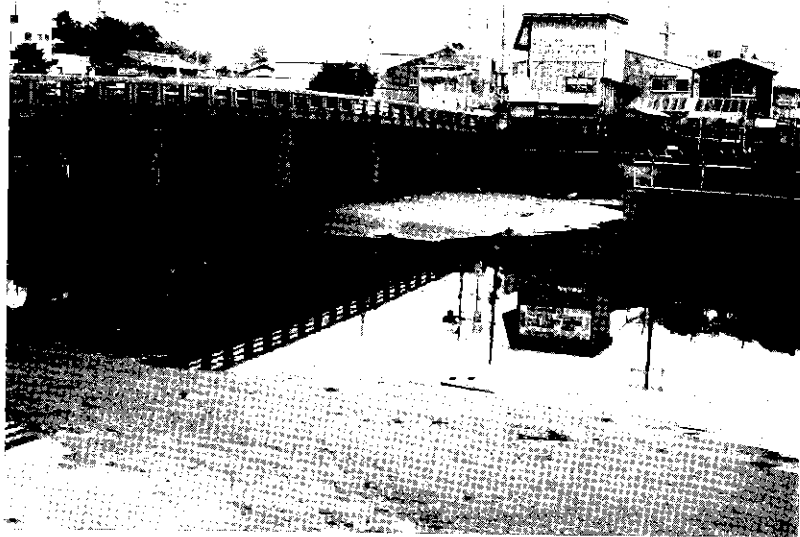
昭和42年8月5日 不潔の筏群
内川をきれいにする会の発端となる



昭和 55 年 4 月 12 日 大門川清掃



昭和 60 年 1 月 29 日 たまったヘッドの除去作業



序文

原 峯三郎さんの御新著刊行を祝う

京都大学名誉教授 岩井 重久

原さんとの面識をえたのは、丁度一年前に和歌山市主催の「内川の現況」と題した私の講演会の席上でありました。

その時の講演の速記録は、原さんが会長をされている「内川をきれいにする会」によって後日印刷配布される栄に浴しました。

昭和四十一年八月から内川の汚濁悪臭発生の状況を身をもって味わった原さんは、所属されているロータリークラブを通じるなどで、その汚濁対策の必要性を、県市をはじめ一般市民にも大々的に呼びかけられ、それが昭和四十七年の「内川をきれいにする会」の発足の契機となったのであります。

また昭和五十一年一月二十九日には、灌漑期ではないので岩出樋門から紀の川水を取り入れ、それで内川をフレッシュするという実験を試みられた。こうしたきっかけから昭和四十六年―四十七年には、建設省の依頼により当時の京大衛生工学科の岩井研究室で内川

の現地における調査や汚染水の測定等を行なった。その結果 (ア)下水道を拡張して有本川や大門川の上流域までを下水処理区域の中へとり込むこと (イ)紀の川水を内川に流し込んでも和歌山港域の水質を悪化させる心配はないので (ウ)紀の川水を内川に流し、少くとも10倍程度の希釈効果が期待できるような流況改善を行う、といった三項目が勧告された。

そして(ウ)が実現されていたので、現今での内川水質はBOD(5)で二十年前の五十分の一、すなわち10^{1/10}程度まで改良され環境基準がほぼ達成されるようになりました。

こうした成果は、一重に原さんを始めとする「内川をきれいにする会」のボランティア精神に徹したキャンペーンに負うものであり、ここに原さんの九十歳の御誕生日を記念して編集された本書の御刊行を、心から御祝い申し上げたいと思います。

内川浄化に挑んだ男 原峯三郎さんのこと

和歌山放送社長 関 亨

街の中を流れる内川といわれる堀や川は、どこの都市でも例外なく黒く汚れている。しかも川の汚れる原因が複雑であるため、沿岸の住民も行政当局もこの厄介者に手をつけようとならないのが通例であった。犯人はしばしば住民自身であったり、工場の廃液であったり、また下水設備を怠った当局であったりというように、告発者自身が犯罪の片棒をかっいでいることが多いからでもあった。

ところが、この厄介な難物に敢然として挑戦した無謀な男がいた。彼は「恩讐の彼方に」(菊池寛作)の市九郎がただ一人小さな鑿ウツを巨大な岩壁に打ち込んだように、底無しへのドロに向かつて執念の槌を打ち下したのである。市九郎を村人達が狂人とあざけたように、知人達はこの男を「内川キチ」と呼んだ。和歌山RCの古いメンバーで、現在「内川をきれいにする会」の会長でもある原峯三郎氏がその人である。

人呼んで峯さんあるいは峯やんともいうのである。彼は「今年九月には九十歳になるので……」と秒読みにはいった人生にあせりを感じながらも、K知事が彼に約束した「六四年までへドロを撤去する」という言葉を信じて内川に執念を燃やし続けているのである。

「昭和四十一年八月十一日の夜や！ 川の悪臭がくそうて眠れんや……」 峯さんはこ
と内川に関することは抜群の記憶力を示すのである。

当時和歌山市内の川と堀は言語に絶する程汚れていた。それは一つには和歌山市が下水
設備の後進都市であり、一つには木材の集散地であったために内川が貯木場として使用さ
れ、剝落した丸材の木皮が腐って内川の底に厚いヘドロの層を作っていたからである。

峯さんは翌十二日、当時県会議長であったS氏を訪ねる。S氏は中学で峯さんの後輩で
ありまた遊び仲間でもあった。堀の臭いがくそうて眠れんや。こんな続いたら住民の
健康にもよくないで！ なんとかならんかいな」と文句をいった。S氏はすぐ「わかつて
いる、峯やんにいわれるまでもなく、むしろがやらんらんことや」といった。S氏も内
川の汚染については知りすぎる程知っており、関心もあつたのだが、一筋縄ではいかに
難物であるだけに手をだしかねていたのであつた。「何とかやってみるか」といい、それにし
ても予算を取らならんや」S氏は独り言のようにそうつけ加えた。

これが引き金になつて四二年二月に県庁に内川浄化対策室が誕生する。峯さんの内川問
題が比較的順調にすべりだしたのは、友人にS議長がおり、当時のO知事が内川浄化に積
極的であつたためであるが、峯さんの強引な押しと熱意がなければ、行政の行動がこれ程
までに敏速ではあり得なかつただろう。

四三年一月には海岸に木材団地建設の知事発表が原氏立ち会いの下に行なわれている。
堀川内の貯木移転こそ内川浄化の最大のきめ手であるだけに、この決定は大きな前進であ
つた。団地は四五年に完成するが、これで貯木問題がすべて解決したわけではなかつた。
貯木は業者の利害に直接関係するだけに簡単にはいかなかつた。

四七年二月に「内川をきれいにする会」が発足する。今までは主として和歌山RCを中
心にして動いていたのであつたが、これからは独立した会として、市民や他クラブにも幅
広く働きかけることが可能になつた。五十年紀ノ川の宇治ポンプ場から注水導入。このポ
ンプ場は三十年程前に造られていたものであつたが、建設省の管轄下にあるところから、
その利用は全くおざなりなものになつていた。もつとも内川に木材が充満していたのでは
注水の効果もあまりなかつたであろうが、毎秒八トンの水を年中無休で注入するようにな
つたのは、全く峯さんの奔走によるものだった。そればかりでなく毎秒十三トン能力のポ
ンプ場建設が決定し推進されている。

第二六六地区の一九七七年地区年次大会で和歌山RCは内川浄化に対する奉仕活動で、
ガバナーから「意義ある業績賞」を受けることになるのであるが、その大きな要因になつ

たものが峯さんの行動にあつたことは付言するまでもあるまい。

市九郎の青の洞門は二十一年で完成するが、峯さんのヘドロは少なくとも六四年まではだめである。二十三年の歳月が流れることになる。しかも六四年になつたからといって内川がきれいになる保障はどこにもない。内川はそれ程難しいものなのだろう。

青の洞門が村人達の参加と応援によつて出来上がったように、内川もまたロータリー村の人人の後援を必要としている。峯さんの執念にもかかわらず、内川浄化は、私の見るところではまだ六分通りしか出来上がっていない。峯さんばかりでなく、市内のロータリアンにとつても一つの課題であろう。

(ロータリーの友、一九八四、十二)

高齢、益々躰樂、内川浄化運動に力を尽す、
原峯三郎翁に呈上す

風鈴の良き音九十も百も鳴る

入道雲わが声聴けと口を開く

つく法師己が一念鳴きつづく

木村一朝

(俳人協会々員)

はじめに

昭和五十九年も光陰矢の如しアツと言う間にすぎ去って行く。今年もまた薄紅の扶容が咲いている内川の浄化と取り組んだ。昭和四十二年八月十一日から今年の八月十日で、十八年余の月日は流れた。

百年河清を待つ大事業とは夢にも知らず、たゞ堪え難いあの悪臭から家族は勿論内川沿いの十数万市民の健康を守らねばならぬ一念でやり出したら後へ引かぬ性根が災していつの間にかやらついうかとかと、抜き差しならぬ内川のヘドロの深みにはまりこんで、十八年余の歲月はアツと言う間に過ぎ去った。

私はまるでドブの溜りへ單車をつつこんだ様なもの、友人各位はそのとばちちりをかぶった様で洵に申訳ないと思っている。

私を支援してくれる友人各位もまんざらいつ終るやら果てしなき道を私と行動を共にして振り廻されるとは夢にも考えなかつた事と永年の月日を随分御迷惑を掛けた事で感謝の念で一杯である。

内川浄化運動の発端

昭和四十二年八月十一日の真夜中フトたまらぬ悪臭で目が醒めた。この悪臭は每晚の様につゞいている。

私は川岸から道路をはさんで約50米位離れた西側の奥の方で起居しているが、夏の夜中にたまらぬ悪臭のため、目を醒ます事もしばしば。盛夏の朝、五時すぎ社員等の出社せぬ内、一仕事に取りかかろうと先ず新鮮な空気をと窓を明けた途端ぷーんとたまらぬ悪臭が飛び込んで来る。家族は勿論川べりに住む十数万の市民が一人残らずこの悪臭に昼夜を問わずさいなまれている。

健康上何の障りもないのか、県会や市会や会議所の人達をあてにしているもこれは駄目だ。身に降りかかる火の粉は自分ではらい除かねば誰も助けてくれぬ。家族はもとより川沿いに住む十数万市民の健康を守るためには何んとかせねばならぬと思いつたのが内川浄化に立ち上った発端であります。

県会議長 笹野 勇氏

幸い当時の県会議長笹野勇さんとは平素格別に実懇にして載っていた。お互いに遠慮のいらぬ間柄であった。

彼は日高郡三十六ヶ村きつての豪農笹野梅吉氏の長男として頭脳頗る明晰の慶応ボーイ。遊芸百般に通じ三味線の音じめに当時有名な新地の名妓お龍さんを驚かした程である。また関西棋院の七段で素人仲間と彼に及ぶ者はなかった。私は五段で好敵手であった。

義太夫も相携えて彼の誘いにまかせて各地に出演した。日高郡の山奥彼の親戚の酒造家の倉庫完成祝。田辺新地や白浜新地など玄人筋をよろこばした。

白浜新地では流石に玄人連中、夕食に新鮮な鯛や伊勢エビなどチリにしてくれと提供された。中でも忘れられぬは、元朝日新聞副社長下村海南先生を龍神温泉の旅館上御殿に訪問して三人して義太夫、(恋飛却、大和往来、梅川忠兵衛)をかけ合いで村の人達をよろこばした事である。

私のドコがお気に召したのか知らぬが、随分下村先生に可愛いがられた。来和の節は常

に私方を宿とされた。

「先生明日の朝、イモ茶粥どうですか」「……そら久しぶりやな」以上の様な間柄であった。従って先生の遺墨を沢山所蔵している。私は矢も楯もたまらず笹野県会議長室へ飛び込んだ。「笹野サンあんた議長の間はこの内川を何んとかならないか」と頼み込んだ。

その時私の多年に亘る新聞記事やその他の書類に目を通していた彼は、いつもと違うよそよきの言葉で「原ハン、あんた今日はえーこと言うて来てくれたなあ。こらわし等がせなならぬ事や、予算取らなあかん。わしに委して置け。こら大きな公害や」と喝破したその言葉が今も私の耳に残っている。今こそ公害、公害、猫も杓子も公害と叫ぶが、当時としては初耳であった。

丁度来合せた黒潮新聞の日根輝巳さんが笹野氏の指図で知事室に案内され、始めて大橋知事を訪問して内川浄化の陳情をした。是が奇縁で日根さんはその後ズーと私を支援してくれている。

忘れもせぬ昭和四十二年八月十一日の暑い日の事であった。まだ市電のチンチン電車が走っていたころの事である。県庁の裏門から扇の芝の電停へ扇子を使い乍ら道々考えた。

『笹やんわしに委せて置けと言うたが、あらい寸ホラと違うかいなー予算取らなあカン

と言うたがあれは一体何の事かいなあ』

半信半疑のまゝ汗をふきふき帰宅した実に暑い日の正午すぎの事であった。亡妻が「お父さん暑かったやろー」とねぎらってくれた。ところが、その三日の後八月十四日笹野議長長司会のもとに大橋知事以下県土木部長、企業局長等と市選出の県会議員諸氏を集め協議の結果、「仮称内川浄化対策室」の設置を決定、翌九月の県会にかけて正式に発足する旨を毎日新聞が大見出しで報道した。これで内川浄化が具体化する事となった。

笹やんのホラと疑ったが彼の政治力に改めて驚いた。内川浄化対策室の新設と浄化が具体化する第一歩の火付け役を果たした事、我ながら嬉しいと思う。これ全く笹野さんの努力に依るものである。

かくして、初代対策室長小川文孝さん以下が任命された。小川さんはこの程まで、和歌山県信用保証協会の理事長として活躍、相変らず御懇情を頂いている。

小川室長御就任以来京橋を中心に東西に流れる市堀川（一六五〇米）に繋留されていたイカダ群の一掃に成功した。内川浄化は一步前進し始めたのだ。

小川さんは、44年〜46年に亘って初代内川対策室長を勤務されたと思う。一介の素寒貧が社会奉仕に立ち上った身の果報をよるこばねばなるまい。

小川さんが就任後二年程後の暮、本年中に市堀川に浮ぶイカダは一本も認めませんからこの点は確約しますと、私にタンカを切った。

私はこれまで友人琴浦嘉八郎君（市内秋月の素封家当時和歌山県福祉協会副会長の要職にあつた）と屢々対策室を訪れ小川室長を激励したものである。琴浦君は私の運動に共鳴して応援にかけてくれたものである。その年の暮、京橋に立つて東西を眺め廻すと一組のイカダもなく水の流れも早くなり、浄化の第一歩を踏み出し、気分的に一寸さっぱりした。

内川浄化対策室廃止

笹野氏の努力で新設された内川浄化対策室の仕事は一応設置の目的達したりとして、五十五年六月之を廃止し、内川に関する事務一切は県河川課の管理する事となり、河川課の山県嘉昭氏が担当する事となった。

和歌山ロータリクラブと内川問題

昭和四十四年七月一日、私の所屬する和歌山ロータリクラブは私の提案を入れて、内川浄化を同年度最高目標に置く事となり、私は都市美化安全委員長に推薦された。

私はこの好機を逸さず委員各位の御協力を得て市長、警察本部長等を訪問して活動をつづけた。

更に文章を作成して小中学生に川の浄化を呼び掛ける事としたが、この作文は幸い当時の市教育委員長（現和歌山市助役稲垣優先生）の計らいで市教育委員会に社会科の教材として採用された。

この当時、毎日、朝日・読売・サンケイ・日経など天下の大新聞は遠慮会釈なくそれぞれ内川の汚濁につき批判の記事を書き始めた。その内、私の印象に残るものを二、三、次に拾って見る。

和歌山市内の川は臭い。どんなにきたないか―汚染度を示す細かい数字を上げるよりもそこに一匹の魚も住めず、初めて市を訪れる人が悪臭に鼻をつまみ、川底の真黒なヘドロを見て『あれは何だ』と顔をそむけることだけで十分だろう。

観光都市、工業都市、文化都市などいろいろ自称したがる市当局がどうしても衛生都市だけは名乗れない。

川の流域に急増した中小工場から流す汚物、くさって落ちる木皮、民家からはき出す汚水、三十万都市の下水道と木の国の貯水場を引き受けては汚れない方が不思議。

二十六年和歌川河口のノリ養殖漁業組合が「汚水をかぶってノリが育たない」と音をあげ、県は小雑賀橋上流に仮ゼキの設置を認め、昭和二十九年に現在の堰をつくった。これで内川は浄化装置のない汚水のプールとなってしまった。

経済の発展と市域の人口増があれよあれよという間に悪臭の黒い川を産んだ。百年の大计を考えない行政の悲劇である。

いまとなつては、かんたんに仮ぜきは除けない。廃液汚物木皮のカスなどがまじつて、川底に沈下した黒いヘドロの量は、大門川と和歌川だけで約三十万立方尺、深いところは二・五尺も積り、県営紀三井寺競技場へそそぎ込むと最上段のスタンド迄いつぱいになる程の量、その毒性は強く昨年夏の漁閑期に、和歌川の仮ぜき中央部樋門を試みに開いたところ和歌浦湾から、雑賀崎の海は黒色に染まり、養殖ハマチが死ぬ騒ぎ。三カ月放水の予定を一週間で中止した。

対策は下水道整備、ヘドロ除去、その上で仮ぜきをとり除き、上流から清流を入れるしかない。

埋立て説、暗きよ説もあるが、土木工学の専門家に言わせると不可能らしい。市は県の管理をそしり、県は市の下水道の遅れを批判するが川はどんどん汚れて行く。

災害招く係留木材 内川から取り除け 毎日新聞 42・7・12

昭和四十二年七月十一日開かれた和歌山市防災会議は、神戸などで大きな被害を与えた七月豪雨のような大雨に襲われた場合内川につながれている木材が災害のもとになると、

県に係留木材の撤去を申入れることを決議、近く知事に決議文を送る。

特に同会議では、委員の三宅和歌山気象台長が豪雨などのとき木材の係留は水はけをわるくし、被害を強めると強調。「ふだんでも逆流する内川の係留木材は、当然木材港に移すべきだ。被害が起きた場合県は責任をとるのか」の声が強かった。

万国博後の西日本 毎日新聞 45・7・25

川べりを歩いて驚いた。チヨコレートをとかしたようによどんだ水、どす黒いヘドロと川の大半を占拠しているでつかい材木、息がつかまるような悪臭、腐った汚物、赤青黄と原色に近い工場腐水液、メタンガスの無気味な水泡：和歌山市内を流れる内川はタレ流しの工場排水、家庭廃水と、木材ヘドロで完全に死んでしまっている。

「川をきれいに、国土美化宣言都市」と、町のまんなかに立っている標識が泣いている。すぐそばを母なる川、紀の川が美しい水をたたえゆつたりと流れているのに、どうしたことになるだろう。

「私は夢のようなことを考えています。きたない川にきれいなすみきつた水を流して、

メダカやフナをすくいたい。川のふち一面に色とりどりのお花を咲かせて、お花畑をつくる。こんな場所で遊べたら最高だなあ」これは市政の願いをのべた和歌山市立城北小学校児童の作文だが、「美しい川への郷愁は子供ばかりではない。私達中学時代にボートで川を往来したり、キレイどころを乗せた舟が浮かび、キスが釣れ、泳ぐことも出来ました。だが、今は悪臭で息がつまりそうで、暑くても窓はあけられず、熟睡できません。行政の立ちおくれは内川をこんなにひどくしたのでしょう。」

川べりに住みついて五十年間同市三木町で洋紙店を経営する原峯三郎さんはこう話している。(中略)浄化を訴える原峯三郎さんをリーダーとして、和歌山ロータリクラブに七月から都市美化安全委員会が発足、『内川をきれいにせぬ限り和歌山の美化はない』と、市民運動の口火も切られた(以下略)

内川をきれいにする会 第一回船上視察記

一、集合場所 ト半町浜 垣本副会長事務所裏

一、集合時刻

昭和四十七年八月二十八日

一、乗船者氏名

会長 原 峯三郎

副会長 雑賀豊太郎

同 垣本喜代治

会 員 多賀神社住職・藤沢内科医長・勝本信夫

一、出発

午後三時半炎熱、焼くが如し。橋、京橋、住吉橋、築地三叉路に至る

一、浮遊物―ビニール入り小豚の死骸・西瓜の皮・玉ネギ

船やがて北進両側民家より汚水流しこむ。汚物生のものであり、無茶苦茶。

一、帰還

伊勢橋下より帰還。

かじ橋、紺屋橋―大橋―海草橋。晴天なるに夕立来る川面波立つ。

夕立にあらずしてメタンガスの発生なり。乗員一同、海草橋に上陸予定の処、一同メタンガスにやられる。垣本氏蒼白となり麦藁帽子の顔、今も顔前に浮ぶ。一同藤沢医師の手当受け、魚又楼迎えの車にて魚又へ。お多賀さんの裸おどり。

各社報道機関おらぬ間に夕食辞退帰社す。

浮遊物、小豚のビニール入り。上流百姓の行為なるべし。河川法第六条に該当。三年以下の懲役五万円以下の罰金。

一般市民より教育を開始の必要あり。仲々大変な仕事か。

町の個性を生かそう 京大教授樋口隆康 日経新聞夕刊 50・8・1

アメリカ旅行の印象では、どこの町へ行っても空港からホテルまでのたたずまいが似ているのに驚いた。

日本の国内を旅行してみても、駅前や繁華街の様相が画一的になって来て、松本も福井も熊本も、大してかわらなくなってしまう。おまけに歩いてる娘さんまでが、どこでもアンアンやノンノから抜け出た様なスタイルである。どこの町も市も繁栄し文化的生活を願っている堂々たる市庁舎を建て、公会堂や文化会館を建てている。それもよからう。しかし、もつとその町の個性を生かすことに力を注がないものかと思う。

先日、和歌山に泊った時、旅館の横に旧和歌山城の内堀があつて、市街地を流れる水の

景色に打たれた。ところが其の水が早く流れているのになんともドス黒く異臭すら放つて
いる。

これでは折角の宝が台なしである。市当局があの水をきれいにしようとしなのはなぜ
だろうとそのセンスを疑いたくもなかった。

歴史的な都市はその史跡の保存を第一義として考えるべきであり、港はその港の美化に
生命をかけるべきであろう。

いずれにしても、各都市がそれぞれ個性を持つことが各都市を生かす道であると思う。

天下の大新聞日経の夕刊にデカ／＼と和歌山市民の大恥を報道されてはたまらない。私
は早速樋口博士の御住所を調べて、手紙を書いた。

『御指摘の内川の悪臭については私共も骨身にこたえる。決してほり放しではない。私
共も内川をきれいにする会を組織して其の先頭に立ち旗を振っている。県も市も努力を重
ねられているが、何分にも四十八年度以降石油ショックの後で先立つ金がない。今しばら
く御辛棒して下さい。必ず清浄化する』と手紙を出してその写しを知事、市長にコピー
して送った。

後日知事にお目にかかった時の事であるが、大橋知事は「原君、先日はありがとう。わ
しに代って代弁してくれて」と言われた。

内川は、和歌山の顔。これを汚くして世間に面目は立たぬ。私の理想とする水の都和歌
山など思いもよらぬ事である。

然し二級河川は県の管理、市長の出る幕でないとの解釈もまた道理か。然し内川はあく
まで和歌山市の顔である。その顔がヘドロだらけの顔では世間へ水の都和歌山など思いも
よらぬ。

市堀川からイカダ取り除く

内川や市堀川から係留木材を取り除く仕事はなかなか並大抵の難事業とはうかつにも少
しも知らなかったが、小川文孝君が初代内川浄化対策室長に就任してから二年位後の事か。
ある日私と対談中、小川氏曰く「就任後、係留木材の除去も出来ず誠に面目ありませんが、
本年中には市堀川のイカダは一本も係留させません。これだけはお約束します」と明言さ
れた。

その年の十二月三十日、私は京橋上に立つて東西を見渡した。駿河町の浜に一組のイカダが残っていただけで、他に東西を眺めてた、一本の係留イカダもなかった。実にすつきりした心地であった。

イカダの害毒

係留イカダは川の流れをとめ、汚物の溜り場所となり、風致を害すること甚だしい。殊にその外皮は川底に溜りヘドロと化し、悪臭を放ち人類の健康を阻害すること甚だしい。それどころではない。殺人機を浮べていると言っても、決して極言過ぎでないと思う。私の近所の製材業者の坊チャンが十数年前の夏、裏のイカダに乗ってトンボ釣りに夢中となり、イカダがぐるっと廻って、その為イカダの下にはまり込み、川底は数メートルのヘドロ、上はイカダにおさえられ、遂に尊き一命を失った。

沢山の人々が救援にかけつけ数時間に及んだが、遂に助け出す事は出来なかった。

最後に小学校の先生の足に触れて水中より引き揚げ、人工呼吸などいろいろの手当てをほどこしたが、遂に息が吹き返らなかった。

以上の事実を私は目撃している。敢えて川に浮べるイカダを殺人機と呼んではばからぬ次第である。

友人竹中泰三君も少年の頃イカダ遊びをしてイカダの中にはまり込み正に一命を失わんとした。首だけイカダの間から抜け出し、かじ橋を通りかかったセンベ屋のおっさんに助けられた由つくづくイカダの害を痛感されている。

昨年十一月、和歌山市内川美化対策室の酒井室長等三人が船上からヘドロ状況を視察された際、河底に落ち込んだイカダの外皮は、皆そーめんの如くヨれヨれに化していた由、即ちヘドロの原料と化している。

現在、ヘドロの除去に苦心しながら、ヘドロの原料イカダの外皮をそのまま打ち捨て置く県の態度は矛盾も甚だしいと思う。

七月豪雨

平素からイカダにからみ、新聞記事に注意した。

42・6・10 (朝日) 危険な不法占拠、さばききれぬ原木。特にのさばる流木 (朝日) 42・

7・10 神戸市のド真中、生田区栄通五丁目の電車道に丸太棒がごろ／＼の写真を見て驚いた。

台風銀座の称ある紀州路に万が一、第二室戸台風の如き豪雨があったら、川に浮んだイカダの流出によって、川沿いの民家はひとまたりもなくイカダの大木でなぎ倒されるであろう。



そんな危険はめつたにないと誰が保証出来るであろうか。為政者はここまでを常に心掛けてほしいものである。

これにつき五十八年十二月十三日、市選出の県会議員諸氏や仮谷知事、華藤土木部長と会合の節もこの朝日の神戸市に於ける惨状写真を見せて注意を促したこともある。又42・7・11(毎日)で災害招く繋留木材を内川から取り除けと警告している。

人体への影響訴えも 県立医大三学生 毎日新聞 49・12・21

和歌山県立医大公衆衛生学教室の学生三人がドス黒くよどんだ和歌川に対する川沿い住民の意識調査をまとめた。

それによると、和歌川の汚染は将来もつとひどくなり、人体への影響を恐れ、かつて魚が泳いだ清流に返す強い願望を訴えながら『このドブ川はどうすることも出来ない』とのあきらめが強いことを示した。また、汚染の元凶を工場排水とし、それを県や市の行政に責任をぶつけ、行政不信が、ありありとうかがえた。

しかし、調査に当たった学生は「どこかで歯止めし、きれいな川にするためには人まか

せてなく、住民自らが団結しなければ……」と、指摘している。

調査にあたったのは同大四年生の土井芳夫さん(二二三)、土門康成さん(二二三)、瀬戸徳雄さん(二二五)、の三人。

沿岸住民が汚染ぶりをどう受け止めているかを探るため、かじ橋、海草―新堀橋、仮ぜきの三地域の沿岸五十メートル以内の民家、百六十三人を無作為抽出、面接方式でアンケートした。(回収率七一・七%)

この結果、いづころから汚れてきたと思うかⅡでは「二十年ほど前」が三四・二%、「三十年ほど前」が二五・四%▽くさい臭いを感じているⅢは八七・七%と十人に九人までが悪臭の悩みに耐えている▽よごれの原因Ⅳでは「工場廃水」が六四・九%でトップ。逆に「家庭廃水」は五・三%と低い▽その責任を「県とする」Ⅴ二七・二%▽「工場だ」が二五・四%、「市だ」が二四・六%「住民の責任」を指摘したのは一四%だけ。根強い行政不信を表している。

対策については「家庭廃水、工場廃水を完全に処理して流す」が六六・七%と一番高く、「川へゴミを捨てないようにする」が二四・五%。

きれいな川を望む半面、▽将来どうなるかでは「同じ」「もっと悪くなる」を合わせると六八・四%。「良くなる」は二二・八%と低い。これは「死の内川を清流に」の起死回生をねらった全国でも例のない県の海水逆流による大がかりな大手術への期待感も薄いことを物語っているといえそう。

しかし住民は川の汚れ、悪臭が健康を害するのでは――との不安感を抱き、ゼンソク、ノドがやられることや、すでにノドの変調や気分が悪い人――など人体への影響を訴えている。だが、その苦情を「市役所や保健所に陳情した」のはわずか七%(かじ橋地域)で、じつと現状に耐え行動を起こしていない。

この調査で、じかに住民と接した土井さんは『昔、魚が釣れた川なのに――』と澄んだ川への郷愁を持つ人が多いが、「いまさら仕方ない」と、手をくたそうとする意欲があまりなく、中には「工場あつての住民だから」と無関心派もいた。

しかし、大きな目で川をみつめ、住民はドブ川改修への意思表示、働きかけをしてもらいたいと話している。

内川をきれいにする会の原峯三郎さんの話「汚染による目に見える人体被害はないが、じわじわとむしばまれることは十分予想される。もっと切実に考え、住民は立ち上がらねばならない」

岩出樋門より和歌川清流

私の一生を通じてやり遂げた少々自慢も出来る大事業は、市の北部を流れる母なる川、紀の川清流を農閑期の間紀の川岩出樋門から一民間人、私の執念に依って、前代未聞の紀の川の清流を昭和五十年一月二十九日、午前九時——昭和五十年三月末日までの六十二日間試験通水の名目に依って建設省を承認させ通水、音浦水門——大門川——市堀川——和歌川下流の十数万市民に清流を流しこんだ事である。

私はかねてから母なる川紀の川の清流を岩出あたりから流しこみ度い希望を抱いていたが、岩出から十数キロ新水路を作るには何億円もの莫大な金がかかる。

夢の様な話としてあきらめていた矢先、突然中学時代の先輩前島義雄君（市内秋月の豪農の息子。色の黒い眼のギョロツとした男）がとび込んで来て曰く、「原お前、内川浄化に熱中しているが紀の川の清流水を岩出附近から流し込め、一発できれいになるぞ」「そんな先輩に教えてもらわんでもわしは早くから考えている、然し、新水路を造るには数億円の金がある。それを考えるととて／＼そらあかん。」

前島氏曰く、「新水路の数億円の金ピタ銭一厘も入らんど。現在紀の川左岸土地改良区の水路を利用せばそれで事足りる。」「エー、そらホンマ？又夢見たいな話やな」彼曰く、「日前宮前の近くに、其の事務所があるから其理事長藤井正夫氏に紹介してやるからついて来い。友人というものは実に有難いものだ」とつくづく其の有難味がわかった。

それから日時を定めて、垣本・雑賀両副会長同道、前島氏の案内で紀の川左岸改良区理事長、藤井正夫氏に初対面の挨拶を交した。一見して好紳士。敬服した。

以来六、七回訪問してお願ひした処「君の様な熱心な男はかつてわしや知らん。わしも和歌山市民の一人や。あんな汚いドブ川はほっておけぬ。然し、通水料として県から壹千万円もらってくれ。そしたら農民を説得して通水しよう」と返事をもらった。通水料壹千万円、何の当てもないのに、好機会を逸してはと即座に引受けて引き上げて来た。

今から考えても身の毛のよだつばかり、まるで無茶苦茶な話である。折から52年度の県予算の審議中、知事室前は県下各地からの陳情団で足の踏み入れる場所もない位の光景であった。

そこで、内川対策室長の松尾義彦君（宇治田市長の従弟）に壹千万円を要求する様提案した処、氏はびっくりして壹千万円の大金を要求するには何々何々何々にイクラ合計壹千

万円と提出せねば財政部から突つ込まれる。そんな大それた提案は出来ぬと言う。原曰く、「松尾君、そら何言うのや。壹千万円を承認せぬと、紀の川左岸では承認してくれぬ。そんな細かい計算はやめて是非壹千万円を要求してくれ。」彼曰く、「あらかじめ知事の内諾を得てくれ」「よっしゃ内諾を得て来る」と引受けた。が何の当てもなく引受けて、これはえらい事引受けた。

成功せぬ場合松尾氏に赤恥じかかねばならぬ。県庁の廊下を行ったり来たり、うるうる考えても名案は浮かばぬ。かと言って、松尾氏との約束を果さねば男が丸つぶれ。コラ大恥をかくのか。

負けん気の強い私は県の廊下を行ったり来たり何回往復しても名案が浮かばぬ。足は自然に県政同志会へ向いていた。何の為に県政同志会の部室を訪ねたか数年後の今日と雖も今以ってわからぬ。

然し、それは窮余の一策、友人笹野議長の助けを求めに行ったものであった。その時、笹野氏はたゞ一人席に居ったが「原ハン今日は何よう」と尋ねられたので詳細報告、何とか知事に内諾させてくれと頼み込んだ。

「今何時や、わしも一しよに行つてやる」彼は秘書課へ電話、同行して知事室へ（知事

応接室は県下の陳情者で満員である）。県会議長の事、順番もへチマもない。大橋知事は奥の処で一人坐っていた。

笹野氏曰く、「知事さん、この男川キチ。今対策室から要求の予算壹千万、アレ認めてやつてよう」。知事さん曰く、「コラ原クンの執念やな」大笑い。イエースともノーとも何とも言わぬ、劇的シーンであった。

大体の空気で承認を取りつけたと思ひ、長居は無用と早速引掲げて其のフニキを松尾氏に報告した。

鶴の一声

翌日午前十一時半頃、松尾氏より電話があり、「只今お蔭様で鶴の一声で壹千万円承認されました。有り難うございます」との報告があった。彼の「鶴の一声」の報告、今以って忘れられぬ。

是完全く友人笹野氏のお蔭である。すべて笹野氏のお蔭と今もって感謝の念で一杯である。持つべきものは良き友人であると思つづく痛感させられた。

52年度県の財政会議の様子は、松尾氏によれば松尾氏より壹千万円の要請に対し、財政部員から随分突込まれたらしいが、大橋知事が「松尾、この壹千万円の通水料を支払って内川へ流し込めば内川が浄化されるか。」松尾氏「ハイ。これは京都大学名誉教授岩井重久博士の説に依るもので清流を流しこめば稀釈する事に依って川がきれいになる。岩井博士の提案であります。」

知事曰く、「それなら壹千万円支出しても良いでは無いか」。財政部員一人の異議を唱える者なく、鶴の一声で決定せし由、松尾氏の鶴の一声が未だに耳に残っている。

壹千万円支出決定の旨藤井氏へ返事をした処藤井氏曰く、「何んとあんたの力は大了なものやなあ」とほめてくれて恐縮した。そこで藤井氏の計いで九月十五日以降、例年の型を破って通水路の安全を祈ってお払い式をやるから知事さんにも出席を願って日前宮司のお払い式に参列してくれとの事であったが、其の後十五日十六日をすぎても藤井氏より何の通告もなきまま、たま〜井関久楠氏と藤井氏を訪れた。

通水式の延引をただした処「エエお前んにも知らぬのか、あれはあかんで」との返事にビックリして聞きたゞすと、一級河川の水を二級河川の内川へ流す事は建設大臣の許可なくしては知事の承認と雖もそれは駄目だ」との事にビックリ。直ちに県知事を訪ねたが、

上京、不在中で明朝九時に来いと秘書課の話に翌日九時大橋知事に其の旨話した処、知事は驚いて、土木部長江戸の仇長崎で、不在の河川課長を呼びたるところ、建設大臣の許可必要とて、目下県と近畿建設局と交渉中とのことに知事はアノ童顔を真赤にして「県と建設局との交渉すむ迄待つてくれ」と言われた。

原曰く、「それはあくまで知事の権限でやってくれ。藤井氏は目下理事長改選の最中、之を断行してくれぬと私が藤井氏に合わす顔がないから、これは是非知事として断行してくれ」と極力交渉、知事は愈々アノ肥満の顔を赤くして曰く、「原君の立場もよくわかるけれども「江戸の仇を長崎で討たれる」と言う事もあるからここは辛抱してくれ」と知事は真赤になって主張されたが、江戸の仇長崎で討たれるとは何の事かと詰問した。

知事曰く、「わしの権限で通水させる事は出来るが、今度県全体の予算獲得に本省と交渉した際に、アノ大橋奴、無利に通水したから、意地悪をしてやれと県の予算獲得に支障を来すかも知れぬ。ここは辛抱してくれ。私は私の意地を通すために県全体の予算獲得に支障を来しては大変」だからとのこと泣く泣く知事の意向を了承した。

試験通水はじまる

同年十二月十九日、県は中沢副知事を、市は梅本助役同道、大阪の建設省近畿建設局にて試験通水の名のもとに昭和五十一年一月二十九日―五十二年三月一日まで間毎秒五トンの水を紀の川左岸土地改良区の農用水路に流すことに決定。

忘れられぬ五十一年試験通水始まる。一月二十九日午前九時猛吹雪視界をさえぎる中、岩手樋門の大トビラ静かに上ると同時に紀の川の清流は紀の川左岸農用水路へ。其の瞬間一民間人の執念が遂に岩手樋門を解放させた。

立会人は垣本副会長。藤井理事長、幸野文治毎日新聞和歌山支局長と私の四人である。私の執念の勝利である。

しかし、この通水により思わぬ支障が起つた。水の事は真にむつかしい。音浦水門迄の途中、低地帯に流れ込み農産物に支障を来すとのことで農家の苦情続出。さらに下流の漁業者よりは水流すくなくなつた為漁業に影響を及ぼす様になつたと反対あり、水の中はなかなかむつかしく夢想もせぬ反対に県もやむなく中止を命ずる事となつた。然し後日八

月二十七日、対策室は通水の効果をはつきりと詳細発表した。其の結果は良好であつた。

大門川清掃

五十五年四月十四日、大門川上流附近一帯の住民の方に呼びかけその附近一帯を清掃した。主婦等住民の方約三百余人出勤清掃、青年会議所会員なども参加してみなで約50トンのゴミをかき出した。

各報道機関もびつくりの状況であつた。やっぱり市民総出の働きにはかなわないと痛感した。

この好結果を見て当然毎年連続して行うべきであつたが、私の怠慢により翌年以後中断のまゝ今日に至っている。勿論私の怠慢は申し訳ないと思つている。然し附近住民の方々も又指図を待たずとも、自主的に出勤して頂けないのは何故であらうか。

五十六年六月二日。私が環境保全功労者として環境庁長官より、表彰されビックリした。

五十六年五月十九日、日本経済新聞が神奈川県藤沢市の二級河川引知川の状況を伝えたので副会長等と六月十三日藤沢市役所を訪れた。先づ私共の度、胆を抜いたのは市役所玄

関前の石碑であった。

都市宣言

川をきれいにする 藤 沢 市

葉山市長曰く、「市民に与える最大の幸福は、

美しい川水と 緑の山である」

と喝破して市役所内に川をきれいにする一課を設け自ら其の指揮にあたった。

帰市後も状況を市長に伝え速かに市職員を派遣して検討し、得心したら速かに市役所内に清掃の一課を設ける様に行政自らの出馬をうながした結果、五十八年四月漸く内川美化対策室を新設、行政自ら清掃に力を注ぐ事となり、御同慶の至りである。

有本新ポンプ場新設着工すすむ

私共は、先に岩出水門より紀の川清流の大門川への導入に低地帯への流入や、又漁業業者の反対など思わぬ支障に遭遇したが、何も約10キロ上流より清流導入を考えるよりも、とに角大門川、紀の川清流を注入すれば、たつ川下流市民の恩恵を考え建設省も又宇治樋

門の老久化を憂れえ数年前より有本新ポンプ場建設の意向があり、建設省本省との予算獲得に数億円を計上するなど着々実行に移りかけていたが、其の新設に伴う騒音などを理由に新設工場の土地買収に反対運動を唱える人があり、是を説得する為一昨年十月十三日夕刻、秋雨しとしと降る中を副会長、雑賀・垣本両氏を伴い、反対を唱える事務所を訪問。其の後数回の交渉により大門川下流市民の恩恵を説き、漸く土地買収に反対せぬ旨了承を得て当時の建設省和歌山工事事務所長松田芳夫氏も感謝された。

当時地主十七人の内それぞれ買収を済まし、現在一軒のみ終了せずの状態になって居る。その一軒は相続の関係で兄弟でもめている。兄弟とも下流市民の幸福を考えてほしいものである。すみやかに解決してほしい。之が完了すれば、新工場建設も案外早目に建設出来る由、現近畿地方建設局和歌山工事事務所英城所長も張り切っている。

宇治樋門通水時間延長 ドラムカン毎秒40本

尚現宇治樋門より毎秒8トンの通水は毎日午前九時——五時終了を夜九時迄延長約五割の増量に通水を成功させた事も人知れぬ働きをして来た。

又、日曜祭日は勿論官庁の事でもあり休日となるが、年間365日の内約60数日間の休日をこれ又休まずに、通水をお願い申出た処、建設省和歌山工事事務所の御好意により休まず通水されている。前述と同様、人知れぬ成果である。

エサ代は引き受けた

「エサ代は引受けた和歌山の原さん」(朝日新聞 46・6・19)をと大見出しで掲載されているのを見て又ビックリした。私は今日まで内川美化について東奔西走して来たが果して内川の河水がどれほど悪水か全く学問的には何一つ知らなかった。

内川の汚水が地下水に溶けこんだり、今頃水道以外に井戸水など飲む市民もあるまいが市内菜種畑附近はまだ井戸水と聞いていたのでその危険を人知れず心配していた矢先、六月十八日の朝日の夕刊に県立和歌山商業高校生物クラブの学生諸君が和歌山県立医科大学の公衆衛生学教室白川充博士の指導を得てハツカネズミ五百匹に内川の悪水を飲まして、その毒性を研究していると報道されたので、この生徒諸君の研究なら真実がありのまま発表されるであろうと、早速二十日の朝同校に寺本校長を訪問して折角のこの研究を続

けてほしいとお願ひした。ところが意外な返事にびつくりした。

寺本校長先生の、「折角の御申出なるもこの研究は近く中止したいと考えている」との意外な言葉にその理由を尋ねたところ「五〇〇匹のネズミは雨が降ろうが槍が降ろうが日曜祭日を問わずエサを休める事は出来ない。エサ代に一日四百四十円必要であるが生徒のクラブの予算は年間二万円にすぎぬ、従つて中止せざるを得ん」という。私はビックリして胸勘定をした。一日つき四百四十円、一ヶ月で一万三千二百円。よしこれ位の金なら自分の小遣をやり繰りしてでも立派に応援出来ると考えたので「校長さん心配なさるな。エサ代は私が引き受けます」と申上げたらテーブルをはさんで対談していた校長先生はツト立ち上つて私に最敬礼をした。私は今もその時の光景は忘れられない。自分ながら自分の俠氣に感心した。立派な行爲であつたと思う。

私は帰宅後早速三万円を包んで提供した。これでエサ代二ヶ月分はあります。当時私は和歌山ロータリクラブの都市美化安全委員会委員長をやっていたので委員会に計つて又五万円支出してもらふことにした。寺本校長先生は大へんによるこんでくれた。

ところが一人の好漢から突然電話がかかった、『今朝新聞を見た。お前一人良いことするな。わしにも手伝わさせてくれ。すぐに社員に持たせてやったから足し前にしてくれ。た

だしワシの名を発表するな」と実に男らしき男であった。彼はお酒に強く、御機嫌になつて、『今ころは半七さん』とよく私にじゃれつきに來た。その男と言ひ寺本校長と言ひ、いづれも立派な人物であつたが病魔の犯すところとなり両氏とも若死にされた。

もし御兩人とも健在であれば私の内川浄化運動を大いに手伝つて援助してくれたのにと、二人の若死にが惜しまれてならない。天命とはいえこの二人の若死には痛恨の至りである。謹んで御冥福を祈る。

勝本信夫氏は市内卜半町の薬種問屋、早大出身の快男子である。『ワシの名を発表するな』との彼の意志にそむくことになるが、「彼の立派な善行を将来に残すことも、大いに意義あり」と考えあえて書き残した次第である。

口学博士

大橋知事には屢々どぎつい手紙を出したが、ある日知事室で曰く「お前の口にはかなわぬ。君に口学博士の学位を進呈する。但し工学の工は口と書くのだ。」彼は全く親しみの持てる人物で随分可愛いがられた。

私はこの十七年間に諸官庁より数々の表彰を受けた。日本善行会の五十四年度の受彰者は全国から七十九人が表彰され東宮御所にて東宮殿下御夫妻に拝謁を賜つた。

御所の大応接間は東山魁夷画伯筆の富士山の大画であつた。私は折角の御招待故中央のところに位置して腰かけた。しばらくして係官が私の名を呼ぶので何事かと尋ねたら、殿下から貴方に御下問があるから一番前へ出てくれとの事。意外な事にビックリして胸の高鳴りをおぼえたが、御夫妻は既に私共の前に現われて殿下が私に何事かお尋ねになつた。私は耳が遠いので返事は出来なかつた。私は遠慮なく殿下に申上げた。「私は若く見えますが既に八十五歳、耳が少々遠いので、お答え出来ませんから、大きな声で質問して下さい」両殿下を始め一同ドツと大笑いした。

「川を美しく小学校の教材に原さんの訴え採用」 毎日新聞 45・11・4

当時の市教育長稲垣優氏（現和歌山市助役）に一文を草して小学校の生徒諸君に川を美しくの観念を養う様お願した。稲垣氏は大賛成されて、その文章を自ら訂正され、遂に小学校の教材に採用された。

然しこのあとが続かなかつた。もし私に根気があつたら当時の小学生諸君に大いに川的美観を植えつけていたであろう。彼等は今や成長して社会の中堅に成長している。

彼等の川的美観意識が如何に内川浄化運動に寄与するか惜まれてならぬ。しかしこれは私のみをせめる前に稲垣さんにわるいけれども、稲垣さんにもその責の幾分を担いでもらいたいと思う。

しかしこの問題は今からでもおそくない。よく稲垣先生に相談して速かに実行したいと考えている。

内川浄化十七年の歩みなど、多数の人々は皆その永年の苦勞をほめ讃えてくれるけれども、全く恐縮の外なく、それは私のトンマのため意外に永くかかつたにすぎません。

若し私に鋭敏な頭があつたら官庁との交渉にしても、交渉相手に振り廻されることなく、案外早く片づくことも疝氣筋相手にしていたから自然に日時を要したと今大いに反省している。

内川浄化作戦 通水の効果はつきり 毎日新聞 50・8・27

県の内川浄化対策室は二十六日、紀の川からの試験通水による和歌山市大門川の水質調査を発表した。

試験通水は同市街地を流れる内川（真霧薪田堀川、有本、大門川、市堀川、和歌川の総称）の浄化作戦一番手として、「死の川」をよみがえらせようと実施したのだが、大方の予想どおり、流す量が多ければ多いほど川がきれいになることがはつきりした。

通水は岩出町の船戸の紀の川岩出取水口から大門川へ放流する方法で延長十一キロの農業用水路を経て和歌山市鳴神の音浦分水口から大門川へ放流する方法で行われた。

期間は第一次が一月二十九日から二月七日まで第二次が同十七日から二十八日まで、第三次は三月十一日から三十日までの延べ四十二日間であった。

導入した紀の川のきれいな水は、第一次毎秒二トン、第二次同二トン一三トン、第三次同三トン一五トン。水質検査は岩出取水口から大門川を経て和歌川に至る六河川の九地点でPH（水素イオン濃度）DO（溶存酸素量）BOD（生物化学的酸素要求量）COD（化

学的酸素要求量) SS (浮遊物質) の五項目について前後六回行われた。

それによると、PHは「毎秒三トンで環境基準に達する」DOは「毎秒二トンで十分」BODは「通水量は多いほど効果大」SSは「効果あまりない」CDOは「効果大」の結果が出た。

このように通水による効果ははつきりしたが、その半面農業用水路の一部に湿地帯があつて、『野菜栽培に支障の恐れなどのデメリットも出ている。このため今後非灌漑期の恒久通水については手続きや法令面にも困難な条件があるので慎重に検討して対処する』としている。(以下略)

船上視察

昭和五十九年九月二十三日附、読売の記事を読んで感激した。

それは、こんな話であつた。十年前の十月十三日に盛岡市内を流れる北上川支流中津川に三十四のサケがさかのぼつて来た。第二次大戦後のロンドンのテムス川は汚れ切つていた。市民の飲料水の七割を提供しているこの川の汚濁指数は、世界保健機関の標準値に達

していなかつた。一九四九年から浄化作戦は始まる。当時は日本円にして、六八〇億円の巨費が投ぜられたという。その結果テムス川はよみがえつた。川にサケの銀鱗がはねた。中津川にしろ、テムス川にしろ、いずれも十年以上の歳月が流れている。

去る五九年八月一八日の船上視察。折あしく盆直後の事として供養の花束が一杯流れて来た。あの状況を見て正直言つて、十七年間の苦労も水の泡であつたのか。今日から市民教養の運動を始めねばならぬかと思うと情けなくなつた。しかも今年九〇歳。死ぬまで教養運動をやっても間にあわぬ。十七年間の辛苦水の泡かと正直なところ、心の中で泣いた。しかしこの読売の記事を見て又元氣が出て来た。北上川の中津川にしろ、テムス川にしろ、いずれも十年以上の歳月が費されている。市民の教養を高める運動、今からでも始めるべきだ。

この世界一のドブ川をきれいにしたら全くその功績は世界の称讃の的となるであろう。我々がこの運動を始めたのは決して名誉欲など勿論微塵もない。あの堪え難い悪臭から市民の健康を救う崇高な目的から始まつたのである。今や河川浄化運動は世界的となつた。斯界の世界的権威、井上靖先生は本年八月二五日付朝日新聞にて、

水を死なせてはならない

と喝破している。

偶然にも、かかる聖業に二十年間も打ち込めた身の果報を喜ばねばなるまい。なお今後幾年の歳月を要するとも、ヘドロの浚渫と仮堰の撤去を速かに達成するまでは、副会長諸君も役員諸氏も誇りを持ってこの聖業に打ち込んでほしいと思う。

和歌山市に内川をきれいにする会発足 朝日新聞 47・2・8

死の川といわれる和歌川をはじめ汚濁のひどい和歌山市内の市堀川、大門川などを早く美しくしようと、七日、内川をきれいにする会が発足した。

これまで和歌川沿いの同市三木町に住んで川をきれいにしようと訴えて来た洋紙店経営原峯三郎さん(仮)が所属する和歌山ロータリクラブや青年会議所、市連合自治会などに呼びかけ、この日約三十人が経済センターに集まって設立総会を開き、原さんを会長に選んでスタートした。和歌川の水で金魚やネズミを飼育、汚濁のひどさを証明して来た県立和歌山商業高校生物クラブ顧問松浦明彦教諭が、同総会で金魚がわづか四分で死ぬなどの汚濁の実態を説明した。

あつまった人たちはあまりのひどさに驚き今後下水道の早期完成、紀の川からきれいな水を流入させることなど、内川浄化の基本対策を県や市に強く働きかけ、県内川浄化対策室に協力、内川を早くきれいにすることに取組むことを決めた。

老人らの執念 実った「よみがえれ死の川」 毎日新聞 50・1・28

「目の黒いうちに死の川をよみがえらせた」との老人の執念が行政を動かし、和歌山市街地を流れる「死の川」内川に二十九日紀の川の清流が試験通水されることになった。

北から紀の川の真水、南から和歌浦の海水を逆流させ、どす黒くよどんだ汚水を浄化しようとする全国でも例のない河水の「大手術」。

内川は和歌山市街地を流れる和歌川・市堀川・真田堀川・大門川、有本川の総称で総延長十六キロ。流れる水は流域の工場から排出される一日平均九万トンの廃液と一般家庭から出る五万四千トンの汚水がほとんど。昨年十二月に発表された水質汚染度全国調査の結果によると、和歌川は汚染度で第三位、カドミウム汚染で一位、内川全体のBOD(生物化学的酸素要求量)は、四〇〇PPMで環境規準一〇PPMの四十倍。真水も海水も導入す

る両面作戦のきっかけは、内川をきれいにする会原峯三郎会長（七八）会員百八十八人の粘り強い運動。原会長は十数年前から内川浄化を訴え続け、夢物語とされた両面作戦を陳情しやつと実現にこぎつけた。

同県の真水導入計画によると、同県那賀郡岩出町の岩出井せきから十一^キの農業用水路を利用して紀の川の清流を大門川に通水する。水量は、一月は毎秒一―二トン、二月―三トン、三月三―五トン。期間は一応三月末迄とし、内川の九ヶ所で水質と水量を測定する。県は昨年導水のための事業費二千万円を予算化し、同年十月実施を予定していた。しかし建設省が浄化には和歌山市の下水道完備が先決、安易な導水はかえって逆効果であるとしたことなどから実施が遅れていたが、県や原会長が猛運動し、同市も下水道早期完備を確約やつと導水が認められた。

清水逆流作戦は和歌川下流に幅四五メートル、高さ三メートルの水門を建設し、毎秒十トン、一日百八十六万トンの海水をポンプアップ。和歌川を逆流させて市堀川から和歌山港へ流し、川掃除をする計画。すでに一昨年から約三十億円で工事を進めており、二年後には完成の見込み。

原 峯三郎氏の話 「紀の川の清流導入計画はみんなに話しても木当に出来るとは信じ

てくれなかった。それが一昨年わざわざ連絡水路を作らなくても、農業用水路を利用すれば導入できるとつきとめ、やれると思つた。つぎはたれ流し企業に運動を集中する。」

垣本副会長こそ会長の影の形に添う如く努力された事は、其の功績偉大なりと痛感する。

「すてないで そのゴミ一つが 死の川に」 ニュース和歌山 49・3・24

内川をきれいにする会では、昨秋内川浄化の標語を一般から募集、応募作品二二五句の中から、『すてないでそのゴミ一つが死の川に』を採用した。

和歌浦の風光について

私は和歌浦の風光について、やがて訪れる観光シーズン。水都和歌山の実現について、血道を上げて来たが、観光客誘致こそ和歌山に活力を与える最大の方法かと思う。

行く春を和歌の浦にて追いつけり 馬蕉

玉津島見れどもあかずいかにして 包み持ち行かむ見ぬ人のために

和歌の浦に汐満ちくれば片男波 あしべをさして田鶴鳴きわたる
義太夫三十三間堂棟木の由来に

一に権現 二に玉津島、三に下り松

四に塩谷よ、ヨーイ、ヨーイ、ヨイトナ

右はあまりにも有名な義太夫節の一節である。四十数万市民の皆さん天より授かった宝物これを台なしにしてはたまらぬ。さらに磨きをかけるべきと思う。若しこれをこのまま放置すれば和歌山市民のセンスを疑うと評されても一言もあるまい。

あえて天下に宣伝して、水都大和歌山を築こうではないか。今や天下に澎湃として起る河川愛護の精神、幸か不幸か人に先がけて「内川を美しくを」唱えて十八年の歳月は流れた。

まことに世の模範として輝いている副会長さん始め役員諸君会員諸君も大なる誇りとしてほしい。

あとがき

人間は一つの目的を定めて其目的達成のために奮闘すること程尊い人生は無いと思う。本書は一人の無謀な男が日本一のドブ川の称ある内川を清浄化するため、二十年の長きに涉つてその悪戦苦闘の記録をただ一つの記憶をたぐりたぐり書きつゞけたものであり、また各報道関係各社の記事を寄せ集めて一冊の本に仕上げたものである。従つて二十年の長きに涉つての記憶を思い出していることであるから多少の間違い、もあると思うが其の点御寛怒願いたい。

昭和六十年九月一日 満九十才の誕生日に

原 峯 三 郎

年表

昭和四十二年

龍神温泉上御殿にて元朝日新聞副社長下村海南先生と笹野県会議長と私の三人で應飛却大和往來の掛合義太夫会
県庁内に内川浄化対策室新設（八月十四日決定）

内川から木材取り除く（昭和四十二年末）

昭和四十七年

八月六日第一回船上視察

昭和四十九年

十二月環境庁発表水質汚濁全国調査

内川のカドニューム汚染 全国第一位

汚濁度

全国第三位

生物化学的酸素要求量400 P P M。環境庁基準一〇 P P Mの四十倍

建設省地方建設局長。和歌山県知事。和歌山市長、和歌山市会議長へ陳情書、請願書提出

昭和五十年

紀の川清流 岩出樋門ヨリ（二月二十九日）

昭和五十五年

四十二年度県の財政会議紀の川左岸土地改良区の農業用水路へ岩出樋門から通水 通水料一、〇〇〇万円、県より支出さす

鶴の一声 大橋知事の英断と笹野氏の努力

二級河川へ一級河川の水は建設大臣の許可必要

江戸の仇 長崎で討たれる

大門川清掃（四月十四日）

神奈川県藤沢市の二級河川引地川の清浄化

宇治樋門通水時間の延長

エサ代は引受けた 和歌山の原さん（朝日）

寺本校長と好漢勝本信夫氏

小学校の教材（稲垣助役）

昭和五十九年

八月十八日盆後の船上視察。川は盆の花束で埋まる。二十年、男の啓蒙運動無駄か。船上にて思わず泣く。

水都和歌山の実現

内川浄化に挑んだ無謀な男 ロータリクラブ（十一月号）

内川とともに二十年

非売品

昭和六十年十一月十日印刷

昭和六十年十一月二十日発行

著者 原 峯三郎

和歌山市三木町中一丁目十五

お詫びと訂正

著者の
 不手際と校正不備の為、お見苦しい点が多々あり、
 申しわけありません。
 左記の通り訂正させて頂きまますので、よろしくお
 願い申し上げます。
 原

正 誤 表

箇所	誤	正
写真1頁	訴える若者	訴える著者
本文11頁2行目	薄紅の扶谷	薄紅の芙蓉
13頁11行目	恋飛却	恋飛脚
22頁14行目	麦蒿帽子	麦藁帽子
39頁13行目	先づ私共の度胆	先づ私共の度胆
40頁13行目	大門川、紀の川	大門川へ紀の川
40頁13行目	たつ川下流市民	川下流市民
42頁10行目	和歌山県県立	和歌山県立
43頁6行目	一日つき	一日につき
47頁4行目	真霧薪田堀川	真田堀川
47頁4行目	有本、	有本川
48頁3行目	C D O	C O D
53頁10行目	馬蕉	芭蕉
54頁4行目	塩谷	塩竈
55頁6行目	間違い、もある	間違いもある
55頁7行目	御寛怒	御寛恕
56頁3行目	應飛却	恋飛脚
56頁13行目	岩出樋門ヨリ	岩出樋門より
奥付	三木町中一丁目	三木町中ノ丁

すてないで そのゴミ一つが 死の川に